台湾における諸文化の関係性について

柳静我*・柳原邦光*・岸本覚*・呉玲青**

Research for East Asia: On the Relationships between Cultures in Taiwan

YU Jeungah*,YANAGIHARA Kunimitsu*, KISHIMOTO Satoru*, Wu Ling-Ching**

キーワード：広域的地域、民間信仰、キリスト教、原住民、文化の多様性、多元性
Key Words: mega-region, popular beliefs, christianity, indigenous people, cultural diversity, cultural plurality

Ⅰ．はじめに

本稿は鳥取大学地域学部の「地域調査実習」（2 年生学部必修科目、通年、2 単位）で、地域文化学科の「東アジアグループ」が 2014 年度から 2017 年度に台湾で行った地域調査を振り返って総括するものである。

東アジアグループは、毎年、調査テーマを具体的に定めてきた。2014 年度は「台湾の文化を考える―言語と媽祖信仰を通して―」、2015 年度「台湾と東アジア―牡丹社事件と民間信仰を通して―」、2016 年度「台湾における日本統治期の『遺産』と記憶」、2017 年度「台湾における様々な文化の関係性について」である。

調査の成果は、毎年、学生と教員がそれぞれ以下の形で発表してきた。学生たちは市民に公開される地域調査成果発表会で報告し、『地域文化調査成果報告書』を他の調査グループとともに作成した。教員の場合は、地域学部の紀要である『地域学論集』に調査の詳細、教育研究の成果と課題をまとめた。これまで発表した論考は 3 編である[1]。しかし、最終年度の 2017 年度については、過去 3 年間の調査の蓄積を踏まえた、仕上げともいうべき調査であったが、残念ながらなかなか論考にまとめることができなかった。それで、本稿では、前半で 2017 年度の調査報告を行い、成果を確認する。後半では、4 年間の調査活動全体を振り返り、総括する。というのは、「地域調査実習」（2 単位）としての台湾調査は 2017 年度を最後に終了したからである。2017 年度の地域学部改組にともない、「地域調査実習」は「地域調査プロジェクト」（2 年生学部必修科目、通年、4 単位）になった。東アジアグループはこのプロジェクトには加わっていない。現在は、学部選択科目である「海外フィールド演習」（1 年生以上が履修可で 1 単位、ただし 1 年生の場合は卒業に必要な単位としてはカウントされない）の 1 つとして実施している。後ほど、やや詳しく紹介する。

そこで海外での地域調査にチャレンジする際の参考となるように、4 年間の台湾調査を振り返って、基本的なことを記録するとともに、調査の成果と課題を明確にしておきたい。具体的には、最初に 2017 年度の学生報告書「台湾における様々な文化の関係性について」の概要と成果を紹介する。次に、調査を中心的に企画された高雄師範大学の呉玲青先生に学生に期待されたことを語っていただく。最後に 4 年間の総括を行う。（柳静我）

Ⅱ．学生報告書の概要と成果

1．東アジアグループの基本的な視点と調査項目及び日程

東アジアグループでは、詳しくは後述するが、これまでずっと「地域」を「海域」の視点から捉えて、東アジアという広域的地域 (mega-region) における人々やモノの移動に着目し、そこで生まれた様々な文化の関係性と重層性およびその変容過程を、長期的な歴史的背景を含めて、様々な観点から捉えるよう試みてきた。

2017 年度は過去 3 年間の問いと研究蓄積を活かして、包括的なテーマを設定することにした。「台湾における様々な文化の関係性」である。調査したのは主に台北と台南で、調査項目と日程は以下の表に示す通りである。5 泊 6 日という短い調査期間ではあったが、お天気に恵まれ、効率よく重要なところを

訪ねることができた。

2017年度の調査項目と日程

日 付	調 査 内 容
調査項目	(1)民間信仰とその多様性 (2)キリスト教の現地化 (3)国立故宮博物院と順益台湾原住民博物館の比較
9/3	・関西国際空港発、台北桃園空港着 〈台北調査〉 ・台湾民間信仰調査：行天宮 ・台北宿泊
9/4	〈台北調査〉 ・龍山寺、地藏王廟 ・護國禪寺 ・保安宮、中元祭典（牽水藏、跑赦馬） ・台北宿泊
9/5	〈台南：天主教と基督教の台湾伝播〉 ・嘉義へ移動（高鉄）、バスチャーター ・鹽水天主堂 ・鹽水から台南へ移動 ・台南開山路中華聖母主教座堂 ・太平境教会 ・台南市街見学 ・台南宿泊
9/6	〈台南：天主教と基督教の台湾伝播〉 ・左鎮へ移動、左鎮長老教会 ・口埤教会 ・新化へ移動、新化教会 王昭文老師講課「台湾教会発展概論」 康文榮先生講演「新化教会と地方史」 ・新化老街見学 ・台北へ移動（高鉄） ・台北宿泊
9/7	〈台北調査〉 ・国立故宮博物院常設展示室（日本語ガイドによる解説付き） ・同院特別展示 ・順益台湾原住民博物館 ・士林夜市 ・台北宿泊
9/8	・台北桃園空港発、関西国際空港着 ・解散

２．報告書の概要：「台湾における様々な文化の関係性について」

ここでは学生の作成した報告書「台湾における様々な文化の関係性について」[2]の内容を簡潔に紹介する。報告書の構成は「はじめに」、「1. 民間信仰」、「2. カトリック教会」、「3. プロテスタント教会」、「4. 故宮博物院」、「おわりに」である。報告書には現地で撮影した写真など33枚が収められている。以下は報告書の要約的な紹介である。ただし、小題は報告書とは異なる。筆者（柳原）が意味を読み取ってつけた。

(1) 問い

「台湾における様々な文化の関係性について」考えるために、「台湾に様々な信仰や文化が入ってくることで、どのような関係性が生まれたのか、そこにどのような意味を見出すことができるのか」という問いを立てた。調査したのは、台北では仏教寺院の龍山寺、民間信仰の廟である保安宮、中華を代表する文物を集めた国立故宮博物院、そして原住民の生活を伝える順益台湾原住民博物館である。台南ではユニークなカトリック教会2つと原住民の教会を含むプロテスタント教会4つである。

(2) 民間信仰と廟の役割―龍山寺と保安宮

龍山寺は移住元の福建省泉州晋江龍山寺と関係があり、1740年に泉州出身者によって創建された。本尊は「観音仏祖」であるが、民間信仰の神々も祀られている。航海神で生活を守る神でもある「媽祖」（「天上聖母」）、水の神「水仙尊王」、学問の神「文昌帝君」、安産の神「註生娘媽」、縁結びの神「月下老人」である。保安宮は医術の神である「保生大帝」を祀る民間信仰の廟である（「媽祖」は祀られていない）。福建省泉州府同安県の白礁慈済宮から分霊されたもので、創建は1805年である。

龍山寺も保安宮も移住元とのつながりが強い。龍山寺は泉州人、保安宮が漳州人で、郷里を同じくする人々のセンターでもあった。19世紀初めには、龍山寺と保安宮との間で武力衝突が発生している（保安宮は衝突で死亡した人々を供養する場でもあった）。保安宮では「牽車藏」と「走赦馬」という中元節の儀式が行われていた。ともに死者の魂を救うための儀式で、神々が力を合わせて不幸な死を遂げた死者の魂を地獄の世界から救い出すとされる。

龍山寺と保安宮を調査して見えてきたのは、民間

信仰と廟が同郷の人々をつなぎ、守る役割を果たしてきたことである。生者だけでなく、死者と生者とをつなぐものでもある。儀式を行って死者の魂を救うことで、生活の安定と無事を願ったのである。

（3）キリスト教と諸文化との出会い

台南市で2つのカトリック教会、中華聖母主教座堂と塩水天主堂を調査した。中華聖母主教座堂（1654年創建）で目についたのは、中国の宮殿を思わせるような建築と「天上聖母」という扁額、そして祖先祭祀である。中華聖母主教座堂のパンフレットには、「東西文化の融合」と記されていた。

塩水天主堂の場合は1955年の創建であるが、1986年に建て替えられている。このとき民間信仰の廟の絵師として有名な郭家が教会の内装を担当している。そのため民間信仰の廟を思わせるものとなっている。ここでも祖先祭祀を示す香炉と位牌が置かれていたが、ほかに「三位一体」と「最後の晩餐」の壁画があった。「三位一体」は道教の「一気化三清」と同じ構図で、父と子と聖霊がすべて人の姿（漢人）で描かれていた。「最後の晩餐」でもイエスをはじめみな漢人姿で、イエスの身体と血を象徴するパンとワインは饅頭と酒器だった。カトリックの教会だが、漢人の文化や民間信仰にきわめて近いものになっていた。中華聖母主教座堂と同じように、イエスの磔刑像や死後の復活を示すものは目につくところにはなかった。

塩水天主堂が漢人の文化や民間信仰にここまで接近したのはなぜか。1つは20世紀半ばの第2ヴァチカン公会議（1962-1965 年）でローマ・カトリック教会が、「他宗教にも真理が含まれていること」、「各地域の教会と文化の独自性を尊重すること」を正式に認めからである。それで「本地化」（「現地化」）が可能になった。もう1つ考えられるのは、塩水は船の行き交う、交通の便の良い地域で、政治・軍事・経済の面で重要な地域として早くから漢人が移り住み、民間信仰が盛んだったことである。そのため教会が存続するには民間信仰への適応が避けられなかったと思われる。塩水天主堂はローマ・カトリック教会の「現代化」 という世界的、歴史的な方針転換とローカルな特殊事情とが複合して生まれたのである。

次に台南のプロテスタント教会である。訪ねたのは漢人の太平境教会と新化教会、原住民シラヤ族の左鎮教会と口埤教会である。太平境教会（1865年以降）では、土曜日と日曜日に礼拝の言語を使い分けていた。土曜日は若者が都会に出て仕事をするときのために北京語で、日曜日には台南語である。

新化教会（1910年）ではレクチャーを受けた。王昭文老師「台湾教会発展概論」と康文榮先生「新化教会と地方史」である。それによれば日本統治期にプロテスタントに対する激しい弾圧はなく 、新化教会は大いに発展したということである。ちょうど日本語教室が開かれていて、お年寄りに日本語で優しく話しかけられた。日本とのつながりを感じた瞬間である。

原住民の左鎮教会（1870年）では、シラヤ語の聖書があり、シラヤ語を認めさせる活動をしていた。シラヤ族には伝統的な水信仰であるアリズ神信仰があったが、宣教師が水では治らない病気を治したことでプロテスタント信仰を信じるようになったという。

口埤教会（1953年）では、教会に向かう道沿いにかつての生活を偲ばせる簡素な建物やレリーフがあった。教会内には竹製の十字架とシラヤ語聖書があり、礼拝もシラヤ語である。住民の 90%が信者で、10%がアリズ神を信仰しているという。住民はまたシラヤ族を原住民として認定するよう政府に強く働きかけている。

原住民の教会は住民のアイデンティティに関わる重要な場となっており、シラヤ族の歴史と文化を尊重し、とりもどそうとしていた。

（4）国立故宮博物院と順益台湾原住民博物館

国立故宮博物院の建設（1965年）については、展示内容のほかに同館建設に関わる研究文献から、中華文化を誇るとともに、中華民国の歴史的・政治的正統性の主張に関わっていることがわかった。故宮博物院のすぐ近くに順益台湾原住民博物館がある。この博物館は「財団法人林迺翁文教基金会」によって1994年に設立されたもので、故宮博物院とは対照的に、原住民の「自然と共存してきた生活」を物語る実に質素な資料が展示されていた。創設者の林清富理事長は、原住民の文物を社会と分かち合って「郷土に親しみ、共存する異民族同士が互いの文化を愛する」ことを願ったという。

蒋介石にとって、故宮博物院は「中華」の素晴らしさと「中華民国」の正統性を国内外にアピールする手段の1つだった。中国文化至上主義の象徴が故宮博物院だとすると、順益台湾原住民博物館は少数

民族に目を向けて、多様な文化が共存できる社会を目指す試みを象徴している。しかし、入館者でいっぱいの故宮博物院に比べて、原住民の博物館では入の姿がほとんどみられなかった。

（5）おわりに

台湾に最初に入ってきたのは原住民である。次が17世紀以降の漢人、17世紀初めのオランダ人とスペイン人、19世紀末に日本人、戦後に「外省人」である。それぞれが信仰や文化をもたらしたが、日常生活で最も根を張っているのは漢人の民間信仰である。キリスト教は、原住民が受け容れたものの、少数派にとどまっている。漢人の民間信仰や原住民の文化に「適応」して、微妙な関係を保ちつつ、信者の生活に向き合っている。

全体としては、様々な文化が積み重なり、互いに影響し合って存在している。しかし、キリスト教の著しい現地化や故宮博物院と順益台湾原住民博物館の存在感の違いに現われているように、多様な文化間にある種の力学をともなう微妙な関係性があるようである。

３．成果

以上が報告書の概要である。なお、報告書に盛り込めなかった問題もいくつかある。たとえば、学生たちは1950年代から60年代にかけて主に山地の原住民の大半がキリスト教に集団改宗したことに着目して、「原住民はなぜキリスト教信仰を受け容れたのか」という疑問を抱いた。牡丹社を調べた2年目の報告書を読み、自らも平地の原住民である平埔族の教会を見て、原住民の元々の信仰世界は、漢人の民間信仰やキリスト教信仰と全く異なっていたのではないかと思ったからである。それで研究文献を調べたものの、難解で、結局、報告書では問題の存在を指摘して、脚注で学説を紹介するにとどめた[3]。報告書の本文で記述するほど十分に理解できたという確信がなかったからである。

このように、現地調査をして見聞きしたことから何らかの意味を汲み取るのは、学生にとっても教員にとっても難しいことである。そのため学生を民間信仰、カトリック教会、プロテスタント教会、故宮博物院の4班に分けて、各班で現地情報と文献情報とを突き合わせて、意味を見出し、それを言葉で表現することを繰り返した。また、中途報告を何度も行い、教員を含めて全員で意見交換して、ようやく発表会と報告書にこぎつけた。

内容については、成果発表会のときに作成した原稿がほぼそのまま報告書原稿になるところまで仕上げることができた。学生たちはよく頑張ったが、その評価については、研究レベルで見れば、拙く不十分であることはいうまでもない。しかし、重要なのはそこではない。学生たちが現地を自分の目で見て何かを感じとり、それをなんとか言葉で表現し、論理化しようとしたことに意味がある。2年生にとってこのようなプロセスこそがかけがえのない経験であろう。教員としては3年生からの卒業研究に向けた第一歩として貴重なトレーニングになったと考えている。4年間の調査全体にいえることであるが、調査を積み重ねた結果なのか、年を重ねるごとに学生たちの問いは鋭さを増していったように思われる。

（柳原邦光）

Ⅲ．学生たちに期待したこと

地域文化学科「東アジアグループ」の台湾地域調査実習に関わって4年目である。毎年のことながら難しいのは、調査テーマ・調査地・関係者などの選択である。地域文化学科の柳静我先生と相談しながら決定するのだが、3年間を振り返ってみると、一貫した関心があったように思われる。台湾における文化の多様性や重層性に関わるテーマを設定しているからである。とりわけ、民間信仰に反応している。それで、2017年度は漢人の民間信仰を中心にキリスト教や原住民の信仰について調べることを提案した。具体的には、大陸から渡ってきた漢人の民間信仰、漢人のユニークなキリスト教信仰、原住民平埔族の信仰である。

漢人の民間信仰調査は媽祖信仰から始まった。媽祖は実在の女性で、当初航海神であったが、やがて万能神となった。台湾には媽祖以外にも人気があり、よく知られている神様がいるので調査することにした。選んだのは保生大帝信仰で、「保安宮」を調べることにした。保生大帝は生前有名な医者で、死後、身体や健康と深く関わる神様となった。保安宮を訪ねたとき、中元節の2つの儀式が行われていた。交通事故、水死など不自然な死に方をした人の場合、神様に怒られて地獄に落ちるとされる。残された家族は死者を気の毒に思い、苦しい場面から救い出すために儀式を行うのである。死者と生者は生きる世界が異なるが、家族には儀式を通じて繋がっていたい、関係をもち続けたいという思いがある。亡くな

った家族を助けたい、助けることができる、という思いである。死別しても人と人とのつながりを諦めていないのである。儀式を通じて人と人とのつながりは続いている。

次は漢人のキリスト教信仰である。民間信仰以外にも、少しユニークなものを見てみたかった。選んだのは､かなり漢化の進んだカトリック教会である。地域文化学科の教員と学生たちは自分の目で見て大変驚いたようであるが、子どもの頃、似たようなものを見たことがあるせいか、私自身はそれほど不自然とは感じなかった。学生たちは調査報告書で父と子と聖霊を描いた「三位一体図」に注目している。とくに聖霊を人物像で描いている点である。この問題については、漢人の文化圏では、抽象的な観念ではなく、具体的な像がないと受け容れられない、想像できない、ということがある。また、学生たちはカトリック教会に祖先祭祀を示すものがあることにも驚いているが、漢人にとって祖先祭祀こそが重要なのである。

最後は原住民平埔族の信仰である。調査したのは平埔族のプロテスタント教会である。ここでの問題は､｢平埔族はなぜプロテスタント信仰を受け容れたのか｣である。というのは、原住民の場合、自然崇拝が根強いからである。漢人は客家のみは石を土地神として崇拝するが、人間中心で、信仰対象を具体的な人物像で表現することを好む。しかし、原住民の世界では、山を信仰しても山の神を人として捉えてはいない。これは実に興味深い点である。こうした点を考えれば、漢人の民間信仰も原住民の信仰世界も、一神教のキリスト教信仰には馴染めないと思われる。実際、台湾では民間信仰が圧倒的で、キリスト教の信者は少数にとどまっている。原住民とプロテスタント信仰については、学説では漢人が強いので、原住民は漢人に対抗するために外国人に近づき、その信仰を受け容れたのではないか、と考えられている。

私としては調査で台湾における様々な文化の複雑さとその関係性を具体的に捉え、その意味を考えたかった。地域文化学科の学生たちにも調査体験を通してこのようなことを具体的にじっくり考えてほしかった。調査計画のねらいはそこにあった。

学生たちは最終的に調査報告書のタイトルを「台湾における様々な文化の関係性について」として、果敢に問題に取り組んだ。決定的な結論を得ることはもちろんできないことだが、3 年間の蓄積が活かされて、2017 年度の報告書に結実しているように思われる。（呉玲青）

Ⅳ．4 年間の総括

１．調査の目的・視点・テーマ・方法

東アジアグループの台湾調査は地域文化学科で初めての海外調査だった。海外を選んだのは、ひとつには「地域」＝「ローカル」「田舎」というイメージを変えたかったからである。地域学部のいう「地域」とは「ローカル」だけではないが、そのようなものとして捉えられがちであった。ローカルな空間だけでなく、もっと大きな空間、国家という枠組みを越える地域もまた研究対象であることを学生たちに示す必要があった。地域調査実習を広域的な地域のなかで「つながりや関係性とその変化を捉えるまなざし｣を鍛える場にできないか､そう思ったのである。

東アジアを選んだのは、陸地に比べて人やモノの移動が容易な海を介して様々なつながりや関係性が重なり、変化していく様子を見ることができるのではないか、そうした関係を歴史的に捉えるようとする長期的な視点を身につける機会になるのではないか、と考えた。

このような発想を下支えし勇気づけてくれたのが、当時出版されたばかりだった羽田正編､小島毅監修、『東アジア海に漕ぎだす 1 海から見た歴史』（東京大学出版会、2013 年）である。同書は、様々な地域をつなぐ「海」に着目して、明確な境界のない東アジアという海域で生成した様々な文化の複合性・重層性およびその変容から多様な意味を見出そうとしていた。国家の枠組みや陸地から見ただけでは分からない、海を移動する人々独特の行動の仕方、国境にとらわれないものの見方や文化を捉えようとしていた。これは地域学部の構想する地域学に組み込むべき、実に魅力的な視点であり、試みである。地域調査実習が始まったとき、当然のように同書を基本文献として学生たちと読み込んだ。こうして東アジアグループは常に見据えるべき基本的な視点をえたのである。

台湾を選んだのは、明確な理由があったからではない。選択肢は他にもあった。中国でも韓国でもよかった。台湾に決めたのは、学生たち自身である。たまたま動画で見たおいしそうな料理に魅かれたのかもしれないが、よくわからない。なんだかいい加減な気がしないでもないが、結果的にはこの選択は大正解だった。四方を海に囲まれ、様々な人々が行

き交った台湾は私たちの視点と問いにぴったりだった。

2014 年度に何を具体的なテーマに設定するのか。これは難航した。しかし、この場合も『東アジア海に漕ぎだす 1 海から見た歴史』を読んで、学生たちが最も反応したものを選んだ。媽祖信仰である[4]。わずか 3 頁の記述だったが、結局、この関心が民間信仰へと拡大して、中国南部の漢人が台湾に伝えた多様な民間信仰が 4 年間を通じた中心的な研究テーマとなった。それはまた、キリスト教との関係や、日本との出会い（牡丹社事件、日本統治期の経験と記憶）を介して原住民の信仰や文化との関係にまで及んだ。人の移動、信仰、宗教が様々な文化の関係性・重層性・変容を検討する際の焦点となったのである。

現地調査は高雄師範大学の呉玲青先生のご協力なしにはありえないことだった。東アジアグループを担当した教員は歴史学の教員（中国史、日本史、フランス史）ではあるが、台湾研究についてはまったくの素人である。呉玲青先生には調査テーマの選定から現地調査の場所・専門家・関係者の選定、調査依頼、下調べ、さらにバスのチャーターなど、何から何までお世話になった。先生も歴史研究者（清代の台湾史研究）であるが、17 世紀から今日にいたるまでの民間信仰等を調査の中心テーマに設定したことで、先生を含めて教員はみんな自分の専門領域を大きく超えて奮闘することになった。

ほかにも媽祖信仰の研究者である楊朝傑氏（当時、台湾中央研究院台湾史研究所研究助理）のご協力も民間信仰を深く掘り下げるのに欠かせなかった。調査に同行して専門家として逐一説明と助言いただいたうえに、鳥取大学で講義をしていただいた。また、歴史人類学の劉正元先生（副教授兼歴史文化及語言研究所所長、鳥取大学にも来学された）や大学院生にもサポートしていただいた。4 年間を振り返れば、調査に協力していただいた研究者や関係者は数えきれないほど多い。今思えば、不思議である。大変なもてなしで、ありがたかった。皆さんには心から感謝を申し上げたい。

現地調査以後についてはすでに述べた通りである。率直にいえば、教員にも特別な方法があったわけではない。それぞれの専門分野で培ってきたものを活かしながら、関係する文献を読んで足りない点を懸命に補った。あえていうとすれば、「地域学」の発想と知見[5]を活かしたことである。私たちは台湾で目にした現象を地域学が重視している「わたし」と「いのち」と「生活の視点」で考えた。シンプルにまずは「生きる」というところから理解し分析しようとしたのである。そう考えると、漢人の民間信仰や原住民の信仰、キリスト教に関心が向かい、問いが深まっていったのは、自然なことだったのかもしれない。　（柳原邦光）

２．４年間を振り返る―成果と課題

台湾地域調査は「東アジアプロジェクト」（正式には「東アジアで語学力と現地感覚をもって活躍できる人材を育成するプロジェクト」）を構成する 4 つのプログラムの 1 つである（他に 3 月の中国厦門プログラム、8 月の韓国ソウルでのプログラム、7 月～8 月の鳥取大学での東アジアプログラムがある）。

台湾での地域調査実習は 2 年生の学部必修科目で、プログラムのなかで唯一単位化されていた。しかも通年科目で 1 年間と期間が長いうえに、地域学部内での中間発表会と学外で市民に公開される成果発表会、最後に調査報告書の作成が義務づけられていたから、学生にとっても教員にとってもなかなかハードルが高かった。もちろん、いい加減なことはできないので、調査計画の立案から報告書作成に至るまですべてを念入りに行った。その甲斐あって、それなりの評価を得たようである。たとえば、調査に必要な資金として学長経費をずっといただいていた（現在も）。また、1 年生は成果発表会を見て、2 年生になったとき、いくつかある調査グループのなかから 1 つを選ぶのだが、台湾地域調査実習を希望する学生は年々増加した。

しかし、参加学生にとって調査がどのような意味ある体験となったかは、実はよくわからない。2017 年度の場合、17 名の学生が参加したが、私（柳）の専門ゼミを選んだのは 4 名だけである（思ったより少なくて、正直、がっかりした）。この 4 名は東アジアプロジェクトのほかのプログラムのすべてに参加して、プレゼンテーションなどもたくさん行って、確かな力を身につけた。就職についても、希望をほぼ実現することができた。しかし、他の学生たちはその後どうしただろうか。

本稿の「Ⅱ－３　成果」で述べたように、台湾地域調査実習が学生たちにとって意味ある経験とトレーニングになったことは間違いない。とはいえ、思い返せば、学生たちの調査に取り組む意欲や姿勢は様々だった。発表準備にも報告書作成にもなかなか

やる気が出ない学生もいた。全体として調査の質を高めたのは、熱意のある学生たちだった。教員としてはもちろん全員に意欲的に取り組んでほしかった。様々な動機の学生たちが参加する必修科目であるから仕方がないが、それでもずいぶん工夫を重ねた。結局、うまくいかず心残りだった。現在の「海外フィールド演習：台湾」（選択科目）と比較して、その原因がはっきりした。

2019 年度「海外フィールド演習：台湾」（2020 年 1 月実施）は通算すれば台湾調査 6 年目となる。テーマは「台湾の文化的多元性と重層性（中国文化・日本文化・西洋文化とのかかわり）」にした。一見して明らかなように、4 年間の台湾地域調査実習の問いと成果を踏まえて、さらに掘り下げようとしたのである。日程は 1 月 4 日から 8 日までで長くはない。参加者は国際地域文化コースの 1 年生 5 名、2 年生 3 名、4 年生 4 名の計 12 名である。1 年生の参加は嬉しい驚きだった。おかげでバラエティに富んだ構成になった。そして、調査はこれまでで最も充実したものとなった。

調査の実際は台湾地域調査実習のときとほとんど変わらない。違うのは選択科目で、学生たちがみんな自発的に参加したことである。1 年生前期に「地域学入門」（地域学部必修科目）と「大学入門ゼミ」（全学共通科目の必修科目）がある。両科目で、台湾地域調査実習を含めて、東アジアプロジェクトを経験した学生たちがプレゼンテーションの機会をいただいている。これは発表者にとっていい経験になるのだが、1 年生にとっても学生生活 4 年間で何をするのかを意識する機会になっている。彼らはプレゼンテーションを見て自分の意思で「海外フィールド演習：台湾」に参加してきたのである。参加のモチベーションは高い。

もう 1 つ台湾地域調査実習と異なるのは、毎日、調査日記をつけ、私にメール送信するよう学生に求めたことである（これは厦門大学から学んだことで、中国プログラムでも韓国プログラムでも採用している）。調査日記をつけるという意識があるからこそ、見たこと聞いたことをしっかり記録しようとする。また、毎日文章にすることで、情報を再確認し整理して、その意味を考えようとすることにもなる。私の方は、日記を読んで事実関係などに誤りがあれば修正して学生に返した。大変ではあるが、学生と教員ともに、自分が行ったことを常に確認し、よかったこと、足りなかったこと、気づいたことをその日のうちにはっきりさせ、ときに修正する作業は、プログラムを常に生きたものとし、創っていくことになる。学生たちは、このような経験を通して「自分が何かを得つつある」という確かな手応えを得たようである。

「海外フィールド演習：台湾」を実施してみて、台湾地域調査実習のもっていた可能性を引き継ぐとともに、さらに充実・深化させる展望がひらけてきたように思う。（柳静我）

Ⅴ．3 回の現地調査に同行して

私（岸本覚）が参加したのは、2 回目の調査からである。つまり、2015 年度「台湾と東アジア―牡丹社事件と民間信仰を通して―」、2016 年度「台湾における日本統治期の『遺産』と記憶」、2017 年度「台湾における様々な文化の関係性について」の 3 回となる。同行した目的は、専門分野が明治維新史の関係で、近代世界システムに編入されていく東アジアの近代を学生とともに考えていくうえで、中国、台湾、韓国などの現地調査は不可欠であると感じたためである。また、同時期に地域文化学科から国際地域文化コースに改組するにあたって、新コースの「国際」をどのように実現させていくのかという学科・コースとしての課題もあった。

台湾における文化・宗教などに関わる調査は、非常に密度の高いものであった。柳先生、柳原先生の事前学習などの成果はもちろんであるが、現地における呉玲青先生のコーディネートや、協力していただいた高雄師範大学の諸先生方や研究者等には感謝しきれないほどの恩恵を被った。あらためてここに感謝申し上げたい。ここでは、この 3 年間同行した教員として、以下 2 点のコメントを述べさせていただきたい。

まず、「日本」という国民国家の枠組みに浸りきった立ち位置では見えてこなかった民族の多様なあり方を肌で感じる契機を与えていただいたことである。2015 年の青山国民小学校、2017 年の西拉雅族[6]などの集落訪問では、台湾の「原住民」との親近性に非常に感銘を受けた。とくに前者のときは、台湾南部の漢人地域、「生蕃」地域、「熟蕃」地域それぞれが自らの文化に敬意を払い、それを守り続けてきたことを確認し、そして学ばせていただいた。後者については、調査に訪れた教会のほとんどが台南市であったが、東洋における西洋のキリスト教受容についていろいろと考えさせられた。詳しくは、『2015 年

度 地域文化調査報告書』、『2017年度 地域文化調査報告書』を参照していただきたい。

近年の日本史においては「日本」「日本人」とは何かなど現代にも関わる切実な問題をマージナルな視点から捉え直されてきている。しかし、鳥取ではそのことを実際に体感し、学ぶことは難しい。今回の調査で学生たちは、台湾の「原住民」との接触のなかで、改めて「日本とは」「日本人とは」という問いを見直す機会になったのではないかと感じた。私も、数少ない日本史の授業のなかで伝えてきたつもりではあるが、所詮は講義授業という限られた場所と時間でしかない。こうした貴重な体験は、グローバル化する世界のなかでマイノリティの問題を考える大きなキッカケとなったと思う。私にとっても、学生にとっても、当たり前のように語る「日本」「日本人」というものを実感として相対化できる重要な調査となった。

第2点としては、台湾における日本統治時代を物語るものの多さが非常に印象に残った。例えば、台南市の新化教会における豊富な資料（文字資料など）の存在は、戦時期の生々しさを伝えるものと言えよう。いわゆる歴史資料への関心は、なかなか学生には難しいと思うので、私自身の課題であるが、是非この調査は継続してみたいと思っている。

恒春城跡の忠魂碑等

次に、恒春城での「忠魂碑」、「兵器整備記念碑」は全く想像してなかったので衝撃的であった。表面が削り取られており、少々読みにくいものではあったが、日本国内の忠魂碑などとの共通点は相当あった。「帝国日本」と戦争の問題をこの台湾でも考えることができたのは貴重な体験であった。

さらに、旧新化尋常小学校「御真影奉安殿」は、昭和6年（1931）10月に竣工されたもので[7]、日本における奉安殿の流れをくむ形式のものであった。戦前日本において最も敬すべき存在である天皇の御真影を納めた建造物の保存は急務である。鳥取県内では、わずか3件しか現物を確認できない状況で、ほとんどの学生や一般にも知られていない。こうした戦前日本の価値観などを体現したものの保存は大切なものであろう。海外でこのような貴重な建造物が保存され、それを見ることができたことは、まさに日本近代史の生きた教材とも言える感覚を持った。

旧新化尋常小学校「御真影奉安殿」

また、台南の調査では、「安平十二軍夫墓」を土砂降りのなか見に行ったのが印象に残っている。2016年度のときだった。ここは、オランダの進出拠点となったゼーランディア城（現、安平古堡）である。この城は、別名を紅毛城、番仔城または王城とよび、台湾最初の城であった。しかし鄭成功の進出によって「安平鎮」となり、台南繁栄の象徴となった[8]。車窓から明らかに日本の墓の形をしたものがあったので、見に行くと旧日本軍で「軍夫」として徴用された人々のものであった。軍夫は、雑役に使用された人々のことで、日中戦争勃発後の人手不足によるものであろう。この台湾から徴用された人々の墓が日本式で造られていたことで、帝国日本の植民地との関わりを知ることができた。

このように、台湾には日本国でも保存が難しくなっている建造物や資料が数多く残されている。歴史認識の問題が取りざたされる昨今であるからこそ、現物の持つ力が要求されるのではないだろうか。日本統治時代を経験してきた台湾での、忠魂碑や奉安殿・軍夫墓所などの存在は、あらためて歴史や、戦前日本の在り方に向き合う、私にとっても学生たちにとっても大きな財産であると思う。　（岸本覚）

Ⅵ．おわりに

4 年間、台湾地域調査実習を実施した。たくさんの学生を引率して調査するのは初めてのことで、すべてが手探りだった。夢中に過ぎた 4 年間だったが、1 年間奮闘して、やれやれ終わったと思ったら、すぐに次の 1 年間が始まるという繰り返しであった。調査がどれだけ充実していても、やはり疲れてくるので、このような調査はずっと継続できるものではない。お休みが必要である。実際、地域文化学科では最低 3 年間の継続を条件としていた。

後継の「海外フィールド演習：台湾」では、期間が短く、義務も少なくなって、教員の負担はずいぶん軽くなった。それでも充実した内容になっている。学生たちにとって東アジアプロジェクトのほかの 3 プログラムにも参加すれば、成長の可能性を大きくすることができる。また教員にとっても「Ⅴ．3 回の現地調査に同行して」で述べているように、台湾調査の収穫は多い。形は変わっても、経験と研究の蓄積を活かして、誰もが成長できる場を大事にしていきたい。（柳静我）

注

1．柳静我 ・柳原邦光 ・浅田萌 ・池本愛里奈 ・岡田紗希子・栗田瑞穂・徐元俊、2015、「東アジアを調査する−台湾語教育と媽祖信仰を通して−」『地域学論集』第 12 巻第 1 号、柳静我・柳原邦光・呉玲青、2017、「東アジアを調査する−台湾の牡丹社事件と民間信仰を中心に−」『地域学論集』第 13 巻第 3 号、柳静我・柳原邦光・岸本覚・呉玲青、2018、「東アジアを調査する−台湾における日本統治期の『遺産』と記憶−」『地域学論集』第 14 巻第 3 号。

2．詳しくは『2017 年度地域文化調査成果報告書』を参照。

3．脚注で示したのは以下の内容である。金子昭によれば、戦後の原住民の集団改宗については以下の説がある。①日本統治期の反動で信仰的空白が生じ、原住民の文化や暮らしも不安定になったところに強力な宣教宗教が入ったという説、②欧米からの物的支援や医療援助などと共にもたらされたためという説、③漢民族への対抗意識からキリスト教を取り入れたという理性的選択（道具論）や「現代性」（進歩論）節。タイヤル族の集団改宗を可能にした条件については、タイヤル族は家族を超えた親族集団をつくらず、「ガガ」あるいは「ガヤ」と呼ばれる共同体単位でまとまる。ガガとは、「ウットフ」（超自然の力＝神霊）信仰を中心にウットフの訓示や規範を共に守る祭祀共同体である。この共同体原理と共同体は、キリスト教の教会原理や教会共同体に通じるところがあり、ガガ単位で集団改宗が行われた。金子昭、2016、「台湾先住民族とキリスト教宣教―とくにタイヤル族の長老教会について―」『天理大学おやさと研究所年報』第 22 号、25～27、31～33 頁。

4．羽田正・藤田明良「プロローグ 海から見た歴史へのいざない」、羽田正編、小島毅監修『東アジア海に漕ぎだす 1 海から見た歴史』（東京大学出版会、2013 年）、35～37 頁。

5．柳原邦光ほか編、『地域学入門』（ミネルヴァ書房、2011 年）、柳原邦光「地域学入門」、『地域学論集』第 14 巻第 2 号、2018 年を参照。

6．西拉雅族（Siraya、シラヤ族）は原住民の 1 つで平埔族に分類される。順益台湾原住民博物館（http://www.museum.org.tw/symm_jp/08.htm 2019/12/30 閲覧）

7．現地の案内看板より（2017/09/06 調査）。

8．『日本大百科全書（ニッポニカ）』（ジャパンナレッジパーソナル）2020/01/11 閲覧 https://japanknowledge.com/psnl/display/?kw=%E5%AE%89%E5%B9%B3%E5%8F%A4&lid=1001000014431